

教育実習の思い出

英語・英語圏文化専攻 教員

前田隆子

カリタス女子短期大学の英語・英語圏文化専攻は、神奈川県では唯一の中学校の英語の教員免許を取得できる短大です。毎年2名から10名ほどの学生が教職課程を履修します。今年度は2名の学生が3週間の教育実習を終え、びっくりするほど成長して帰ってきました。今回はその2人に教育実習の思い出を綴ってもらいました。

英語・英語圏文化専攻2年 野村厚子(川崎市立有馬中学校にて教育実習)

私にとって大変貴重な経験をした三週間について振り返ってみたいと思います。

実習に行く前は不安ばかりが募っていて、普通の学生という立場から一変して、教育実習生として教育する立場になったという実感が湧いていませんでした。しかし、初日に中学校の門をくぐり校内に足を踏み入ると「おはようございます。」と生徒たちが元気のよい挨拶で迎えてくれ、その瞬間にずっと背筋が伸び、たとえ実習生であっても生徒から見れば先生という存在であることを忘れてはいけなかったと思います。

最初の一週間は、自己紹介から始まり、先生方の授業を観察し、自分なりに様々なものを吸収しました。しかし、授業観察をする際の先生方へのお礼や挨拶が不十分だったため指導教官の先生に注意されたことが反省点でありました。

二、三週目になると徐々に授業実習をやるようになり、自分の授業の未熟さを知り反省点ばかりが出て来て、落ち込むことが多々ありました。しかし、指導教官をはじめとする先生方が助言を下さったり声をかけてくださり、大変心強く感じました。

担当のクラスについては、生徒たち一人ひとりにそれぞれの個性があり本当に楽しかったです。最初のうちは、上手くコミュニケーションがとれなくて悩むこともありましたが、自分から積極的に行動しないと何も変わらないと思ったので、次の日からは自分から話し掛けてみました。そうすると、さっそく生徒がなついてきて、それから生徒たちがとてもかわいく感じ、なんと喜んでくれてたまらなかったです。

最後に、三週間という教育実習の期間の中で辛いと思ったことが何回もありましたが、ここでしか学べない素晴らしいものを得られたのでよかったと思っています。

英語・英語圏文化専攻2年 鈴木美香(横須賀市立坂本中学校にて教育実習)



鈴木美香さんの
研究授業風景

私は現在このカリタス女子短期大学で教職課程を履修しています。今年度は例年に比べ履修者が少なく、たった2名であり寂しく感じることもありますが、先生方にはより深い授業をいただいています。1年次は、英語の勉強はもちろん、「教育方法の研究」で英語をどう教えたら効果的かを、また「学校教育法」、「教育心理学」も学びました。さらに介護施設や養護施設にも実習に行きました。2年次では模擬授業をしたり、実践的訓練を行いました。

そしていよいよ5月16日～6月2日の約3週間、母校である横須賀市立坂本中学校に教育実習に行きました。教育実習が始まる前夜は緊張でほとんど眠れませんでした。いざ母校に足を踏み入ると、変わらない校舎や窓から見える景色、そして制服姿の生徒たちに「ガンバレ！」と背中を押されているような気がしました。私は1年1組の担任と、1年生4クラスの英語の授業を担当させていただきました。第1週目は授業見学が主であり、2週目から私が授業を行う教壇実習が始まりましたが、必死に作成した指導案が上手くいかず再度作り直すというこの繰り返しでした。

3週目半ばには教育実習の山場、「研究授業」というものがありました。校長先生を始め、各先生方、また短大から前田先生もいらして下さり、計十数名の先生方が後ろから見てくださるという授業で、人生で最も緊張した瞬間でした。しかし3週間の集大成を見せる場面なので私なりに全力を尽くしました。時間よりも早く進んでしまったりもしましたが、大きなミスはなく無事終えることが出来ました。そして最終日。授業を教えたクラスから寄せ書きをもらったり、担当クラスの生徒一人ひとりにメッセージ、そして花束をもらい、恥ずかしながら号泣してしまいました。

この教育実習で「頼られる喜び」、それと同時にそこに付随する「責任」について身を持って学ぶことが出来ました。また、私が大変お世話になった教科・学級指導教諭の鈴木由美子先生と私が同じ苗字だったので、生徒たちが私のことを「美香先生」と呼んでくれたことも特別な感じがしてとてもうれしかったです。この3週間は長いようでとても短く、人生で一番濃密な時間となりました。一生に一度しかないこの経験を、決して無駄にしないようこれからの人生に生かしていきたいと思っています。

英米文学の故郷

～第20回 オックスフォード その2～

英語・英語圏文化専攻教員

伊藤 知子



パーシー・ビッシュ・シェリー

パーシー・ビッシュ・シェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792-1822) は、イギリスのロマン主義の詩人です。彼はウエスト・サセックス州 (West Sussex) のウォーナム (Warnham) に準男爵位の相続人として生まれました。パークシャー州 (Berkshire) にある名門イートン校 (Eton College) で教育を受けた後、1810年にオックスフォード大学 (University of Oxford) ユニヴァーシティ・カレッジ (University College) に入学します。シェリーは『無神論の必然性』 (*The Necessity of Atheism*, 1811) というパンフレットを出版したために退学処分を受けましたが、現在ではユニヴァーシティ・カレッジには彼の海難を追悼する像があります。私がオックスフォードを訪れたのは1995年の8月でした。

1811年、シェリーが19歳の時に16歳のハリエット (Harriet) の境遇に同情して結婚しますが、この結婚は破局に終わります。別居中のハリエットが自殺した後、恋人メアリ (Mary) と結婚して1818年にはイタリアに移住します。メアリー・シェリー (Mary Shelley, 1797-1851) は怪奇小説『フランケンシュタイン』 (*Frankenstein*, 1818) を書いた小説家です。1819年には名作「西風に寄せるオード」 ("Ode to the West Wind," 1819) が完成します。有名な「冬来たりなば、春遠からじ。」 (*If Winter Comes, can Spring be far behind?*) はこの詩の最終行です。1822年にシェリーはヨットで嵐に遭い、水死しました。まだ29才でした。遺骨はローマ郊外のプロテスタント墓地に葬られました。



ユニヴァーシティ・カレッジ

私が初めてシェリーの作品に触れたのは、高校時代の英語の時間でした。何十年も前のことなのに、先生が「ひばりに」 ("To a Skylark," 1820) を朗読する声が今でも聞こえてくるようです。現在、英米詩を読むゼミを担当していますが、先月はシェリーの詩を読みました。彼の情熱と豊かな叙情性はいつの時代にも若者の心に訴えるようです。

“British Hills” in 2006

英語・英語圏文化専攻教員

北川 宣子

英語・英語圏文化専攻のプログラムで、学生の楽しみの一つに異文化体験学習があります。これは1年生全員が6月初旬に福島県の羽鳥湖の近くにある“British Hills”に行く1泊2日の研修です。18世紀から19世紀の英国の建築様式を再現したこの宿泊施設で学生たちは異文化に触れながらネイティブ・スピーカーのスタッフとの対話を楽しむ機会が持てます。

今年は6月4日、5日に実施しました。6月とはいえ、標高1000mという高いところに位置するので朝夕はクローゼットに備え付けられたマントを羽織ってダイニングホールまで行かなくてはならないほど冷えますが、今年も天候に恵まれ、学生たちは自然の中で英語を満喫してることができました。

ところでこの体験学習は今年で7回目ですが、なぜ寒いところなのに6月に？という疑問を持つ学生もおります。カリタスで英語を学ぶ1年目の prelude として異文化の中で自然に英語に触れ、モチベーションを高めてほしいという私たちの願いからこの時期を選びました。語学の上達はモチベーションを高く持つことがとても重要です。2年間の英語力を TOEIC を通して見ていると、目標をしっかり持ったモチベーションの高い学生は TOEIC のスコアの伸びも目をみはるものがあります。この野の花が咲き乱れる季節に、学生はそれぞれに、Cooking クラスでスコーン作りを、Aromatherapy のクラスではハーブやエッセンシャルオイルの効能を学びながらのバスソルト作りを、Design a T-shirt のクラスではオリジナルな色とデザインで染めたTシャツ作りを、そして3-D Card のクラスでは Peter Rabbit などを3次元の浮き上がった絵に切りぬきフレームに入れて楽しみました。夕方はフルコースのディナーに備えテーブルマナーを学び、英会話を楽しみながら夕食を取り、夜はパブ、プール、スノーカールーム (ビリヤードのようなゲーム) などで自由な時間を過ごし、スタッフと英語で語らう時間を持ちました。翌日は、前日の各レッスンのグループに分かれ、自分たちの作品を見せ合いながら英語でプレゼンテーションを行ないました。学生たちはそれぞれに「寒かったけれど、きれいだった。」「ちょっとしたファンタジーを体験できてよかった。」「2年生になっても行きたい。」「もっと良かった。」「1泊は短い。」「楽しく英語が学べてよかった。」「スタッフの方と英語で話したり多くの体験をしていくうちに、ずっとここにいたいと思うほど楽しかった。」「もっと学生同士の間で英語を使うように努力すればよかった」など様々な思いを胸に帰路につきました。たとえ短くとも British Hills での疑似留学体験がこれからの2年間の学生生活の活力になれば嬉しく思います。



Top Left : Cooking の授業風景

Bottom Left : Design a T-shirt グループの作品

Top Right : 3-D Card グループの作品

先生が学生だった頃

このコーナーでは、カリタス女子短大の先生方がどのような学生時代を送ったのかを、学生によるインタビュー形式でお届けします。今回のゲストは、非常勤講師で Oral English をご担当の Damon Brewster 先生です。インタビュアーは、英語・英語圏文化専攻 2 年の野口麗花さんと石川ゆかりさんです。



Damon Brewster 先生

-From which college did you graduate?

D: I graduated from two colleges: One in York, the other one in Leicester.

-What subject did you major in?

D: In York, English Literature and History of Art. In Leicester, Applied Linguistics.

-Why did you come to Japan?

D: Love! ... I met my wife in London and she is Japanese.

-Why was she in London?

D: She was studying jewelry.

-Recently, what are you absorbed in?

D: The World Cup!! And cooking and playing with my daughter.

-How old is your daughter?

D: She is five years old. She goes to pre-school.

-What kind of food can you cook?

D: Japanese, Italian and English.

-Do you usually eat Japanese food?

D: Half and half.

- You can cook Japanese style, what dish do you recommend?

D: *Izakaya* food. Mixed natto, avocado and tuna (raw fish). Then, add wasabi and soy sauce, and mixed. It's very healthy.

-What do you think about Caritas students?

D: They are friendly and have big dreams.

-Thank you very much



Anime Expo 2006 にて

URL: <http://www.fansview.com/2006/>

animeexpo/Ax06groups.html

最近、日本でもテレビで「ハイ！ハイ！パフィー・アミコミ」というアニメを観ることができるようになってきました。これは、アメリカで製作されたもので、大貫亜美と吉村由美による日本人女性デュオのパフィーをモデルとしたアニメです。企画したのは、アメリカのケーブルテレビのアニメ専門チャンネル Cartoon Network のプロデューサー、サム・レジスターでした。2004年のアメリカでの初回放送では、同局過去最高視聴率を獲得するほどの大ヒットとなり、放映は現在も続いています。レジスターは来日した際、「いろんなものが日本から来るけど、待つだけでなくこっちから引っ張ってみたい」と企画した理由を説明し、「日米のテーストが融合したこのアニメを、日本人の人にも楽しんでほしい」（『朝日新聞』2005年4月19日）と抱負を述べました。

ここでレジスターは「いろんなもの」と称していますが、実際、日本のアニメや漫画だけに注目してみても、数多くの作品が次々と太平洋を越えてアメリカへと渡っています。宮崎駿監督の『千と千尋の神隠し』によるアカデミー賞の

受賞は、アメリカの人々に日本のアニメが受け入れられたことを示す一例でもあります。先に挙げた Cartoon Network でも、「ドラゴンボールZ」「ポケモン」「ワンピース」「ナルト」「犬夜叉」「ルパン三世」といった日本のアニメを観ることができます。もちろん英語に吹き替えられたものですが、このような形で、一般家庭で簡単に観られるようになったことが、日本のアニメを身近にさせ、人気を確かなものとし、パフィーのような作品が成功する土台をつくったともいえます。また、日本の漫画も、Manga として、マニア向けの専門店だけでなく、一般の人々が行くショッピング・モールの本屋でも簡単に買い求めることができるようにまで浸透してきました。

このような人気の高まりは、毎年アメリカで開催される Anime Expo の入場者数が年々増加していることからもうかがえます。日本のアニメをアメリカに紹介するという意図で始まった催しですが、今年の Anime Expo 2006 も、ロサンゼルス近郊のアナハイムで、7月1日から4日まで開催されました。第15回を迎えた今年は、4万人もの入場者を集めるほどの盛況ぶりだったようです。アニメ好きの若者たちが、おもしろいコスプレをして集まる姿は興味深い光景です（写真参照）。また、アニメを通して、日本の文化に興味を持つ若者も多いようで、実際にその場に行った友人の話によると、会場には、日本舞踊や書道を体験できる場も設けられていたとのことでした。きっかけは何であろうと、アメリカにとって地理的に遠い国である日本に対して関心を向けてくれることは、日米の相互理解への第一歩のようで喜ばしいことといえるでしょう。

サークルの輪

英語・英語圏文化専攻 教員

前田 隆子

今回紹介するサークルは、「中国文化研究会」です。カリタス女子短期大学では、ここ数年外国人留学生が徐々に増え、今年度は中国人学生が数名在籍しています。その中の鄂海麗(かく・かいいい)さんが部長となり、中国文化研究会が発足しました。第1回目の会合では、全員で餃子作りを行いました。小麦粉から皮を作り、中身を詰め、美味しい水餃子が出来上がりました。食べながら「ハオチー(中国語で「美味しい」の意味)」の発音練習をしたりして、和気藹々と過ごしました。今後は中国語会話の練習に取り組む予定だそうです。

Kaleidoscope 第22号はいかがでしたか？ 皆さまのご意見・ご希望・ご質問など、お気づきの点を maeda@caritas.ac.jp までお寄せください。

2006年 7月10日発行

発行責任者： 北川宣子

編集協力：東京工科大学CS学部 堀 竜太郎

カリタス女子短期大学

Caritas Junior College

〒225-0011

横浜市青葉区あざみ野 2-29-1

Tel:045-901-5133

Fax:045-901-5066

URL: <http://www.caritas.ac.jp/english>